

京機カフェ：産業遺産探訪 第2回

テーマ：江戸時代の金属加工と農業経営

探訪先：枚方市 枚方市立旧田中家 鋳物民俗資料館
東大阪市 鴻池新田会所

探訪先の説明：

旧田中家 鋳物民俗資料館

旧田中家 鋳物民俗資料館は、江戸時代中期に建てられ、昭和40年頃まで枚方・上ノ町で操業していた鋳物場と母屋を主体としています。これらは廃業後枚方市に寄贈されたので、王仁公園に移築して昭和59年に開館しました。江戸時代の姿を残す国内唯一の鋳物場とされています。江戸時代には北河内・南山城の寺院の梵鐘や半鐘など大型の鋳造品、鍋・釜や農機具などを製作し、そのいくつかは今も残っています。枚方は京都と大阪の中間に位置し、淀川の舟便もあって古くから交通・経済の要衝でした。このような背景で田中家の歴史は江戸・桃山・室町・鎌倉時代よりさらに遡るといわれています。

鋳造は金属加工の基本技術の一つで歴史は古く、奈良時代には政府の手で大仏など大きい鋳造物が作られました。律令の時代に既に典鑄司という官職があり、正六位上の公家が長官になっていたといえます。時代が下り室町時代に、紀姓の新見氏から真継久直に跡職が譲られて以後に江戸時代を通じて、公家の真継氏が鋳物師を支配するようになり、このために発行した文書が**真継文書**として残されています。このうち江戸初期までの古文書は「中世鋳物師史料」として整理され研究者の貴重な資料となっています。展示物の中には田中家も記載された史料があり、古い時代の日本の製造業を取り巻く制度の在り様とそれの醸し出す雰囲気想像させます。

館内には昭和40年頃まで使われていた**甌炉**（コシキロ）と復元された**天秤鞆**（テンビンフイゴ）の踏み板、鞆を踏む人を甌炉の高熱より護る遮熱版があります。甌炉に風を送る鞆の風袋はありません。昭和10年頃に鞆をやめて電動の送風機に替えたということです。溶解炉への送風は溶解作業の成否を左右する大切な工程で、元禄時代に天秤鞆が開発され甌炉の操業が大いに改善されたといえます。梵鐘の鋳型製作に使った回し形など鋳造工程で使用された工具類が展示されています。

この資料館創立に当たり、当時の鋳造技術の歴史研究家を網羅したプロジェクトチームが編成されました。奈良の大仏の研究で有名であった近畿大学理工学部の**石野 亨教授**を委員長とし、網野善彦氏、樋口隆康氏など16人の委員が日本の鋳造の歴史を大きく踏まえたうえで、田中家の鋳物師の歴史を展望されました。これらの結果は展示品に現れています。詳細な解説書も作成されて太古から現在の鋳造技術までの歴史の流れとその由来を知ることができます。

鋳物場に隣接して経営者の居宅であった母屋も復元されています。江戸時代の例に漏れず経営者は農業を兼営していました。普通の農家よりやや広い土間を持つ母屋は、農業を中心として昭和中期頃まで営まれてきた北河内の民俗習慣を伝える器物の収集と展示に使われています。

王仁博士の墓(参考)

鋳物民俗資料館は王仁公園の一角にあります。すこし離れたところに記紀の時代・応神天皇16年に百済から論語10巻と千字文1巻を伝来した王仁博士の墓所と伝えられるものがあります。王仁博士は上記のほか、応神天皇の太子にいろいろの典籍を教え、その子孫は有力な帰化系氏族・西文(かわちのふみ)氏として大和時代に外国との文通の役割を担ったと伝えられています。西文氏の一族は河内の南の方に住んでいたといわれています。

古今集の仮名序に「なにわづに さくやこの花冬ごもり いまははるべと さくやこの花」という歌があり、この歌の作者は王仁博士であるとされています。大阪の土地を詠みこんだ歌としてひろく知られ、大正時代に開発された臨海工業地帯の区の名前にもなっています。しかし江戸時代から、歴史と格調の二面から考えて、奈良時代に作られたのではないかとも言われており、応神天皇に次いで難波の宮に君臨された仁徳天皇の事跡顕彰の一環として、王仁博士のこの歌が広く知られるようになったとも云われています。

もともこの土地に古くから文字のない自然石の大きな碑があり、近くの寺院に残る記録によって、江戸時代中期にこの地方の地誌をまとめた「五畿内志」の編者 並川誠所が考証し、領主 久貝弥右衛門に進言して、この自然石の傍に、享保16(1731)年、「博士王仁墓」と書いた石碑が建てられました。さらに、時代が下り文政10(1827)年、近くの招提村 家村孫右衛門と有栖川宮家臣 大石兵庫が、有栖川宮熈仁親王のご染筆「博士王仁墳」を戴き、すこし離れた場所に大きな台付きの碑が建てました。

近代になって、大阪市が主催して明治32年に仁徳天皇1500年祭を行った時、その付祭として王仁博士の大祭が行われ、樹木を植えて周辺が整備されました。昭和13年には、大阪府がこの墓地を史跡に指定しました。

百済は現代の韓国・全羅道です。時代が下がって白村江の戦いで百済・日本の連合軍が新羅・唐の連合軍に敗北し百済国が滅亡したのち、百済の貴族が日本に亡命・移住し、あちこちに百済人の遺跡が残っています。いま、この場所は、昔の華やかな時代の遺跡として注目され、日韓親善のポイントとなっています。1984(昭和59)年に韓国無窮花(ムクゲ)植樹運動本部が墓所を整備し、1999(平成11)年には金鐘泌元首相が来処して記念植樹を行い、2006(平成18)年には朝鮮様式の百済門と付帯する建物が建てられました。

鴻池新田会所

18世紀の初め、宝永元(1704)年に大和川が堺の方に直進するよう付け替えられたあと、河内平野北部に広い面積を占めていた新開池、深野池が干上がり、古い河川敷と共に新田開発の対象地となりました。大阪市内の豪商や寺社が資本を出して新田開発に関りましたが、そのうち大きいものが、新開池跡を開拓した鴻池新田と、深野池跡を開拓した東本願寺による深野新田でした。その他、平野屋、菱屋など多くの名前が残っています。

宝永4年に造成された鴻池新田は、現在残る会所を中心として寝屋川の南岸に東西に伸びる約158町歩(ha)の広さで、経営は戦後の農地改革まで続きました。会所はこの広大な農園を管理する現地事務所であり、収穫された作物の収納や、多数の耕作農民の生活維持など多様な用途に使われたと思われま

す。戦後、消滅した会所は多いのですが、この会所は、戦時中に鴻池家のご当主が疎開して住んでおられたとかのご縁で、幸い昔の姿のまま保存され、東大阪市に寄贈されて1985年から10年をかけて補修の手が加えられました。これにより盛時の江戸末期・嘉永年間の様子を偲べる形を残し、国史跡 重要文化財に指定されています。

江戸時代、河内の農業経営は、木綿、菜種など穀物以外の商業的な農産物の生産が特徴であったと言われていています。昔時の面影を偲べるものは現在殆ど残っておらず、あれこれの断片的なものや唄・文章から想像力を働かせるだけしかありませんが、これも歴史探訪の楽しみの一つです。

会所のスグ横のJR学研都市線(片町線)は明治28年の開通で、当初は名古屋行きの汽車が走っていました。地所の中を分断して鉄道が通るのを認めた当時の鴻池家の当主は、かなり開明的な考えの持ち主であったと想像されます。この鉄道会社(浪速鉄道)の出資者の一人かも知れません。昭和になりこの地域が大阪市内で働く人達の住宅地となってから、寝屋川と鉄道の間広い土地を住宅地に造成する土地会社も経営し、大阪市営水道を延伸して敷設されました。

開通当初、鴻池新田駅はなく大正になってから開設されました。大正時代の初め、現在の京阪電車、近鉄奈良線がほぼ同時1912年に開通するまで、この鉄道は大阪から東に向かう唯一の路線でした。今も残る難読駅名は鉄道の歴史の古さを物語ります。